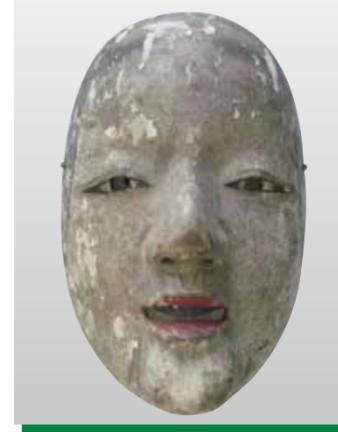


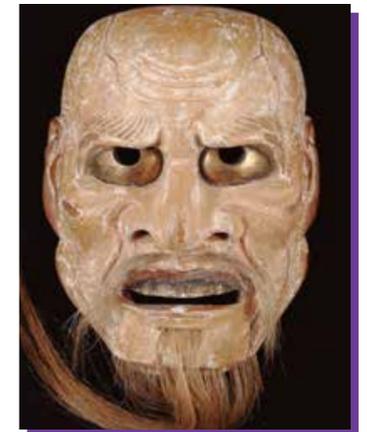
むかしむかしを知ること
新しい**大淀町**が見えてくる。



笛のひこしろう (イラスト M.W.)



「能楽」の
ふるさと
大淀町



奈良県大淀町教育委員会

〒638-0812 奈良県吉野郡大淀町榎垣本 2090 番地
TEL.0747-54-2110 FAX.0747-54-2112
<http://www.town.oyodo.lg.jp/>

なるほど、そうなんだ！

ユネスコ・無形文化遺産

「能楽」と 大淀町・松垣本猿楽座

室町時代から江戸時代までの約 300 年間、「能楽」の源流、吉野猿楽の一座が活躍していました。

ユネスコ・無形文化遺産にも登録された
日本の伝統芸能「能楽」のはじまり。



第 15 回能楽座大淀町公演「能高砂」

「能楽(能・狂言)」は、平成 20 年(2008)11 月「人形浄瑠璃文楽」、「歌舞伎」と共に、ユネスコの無形文化遺産に登録された日本を代表する伝統芸能です。その源流となる「猿楽」は、奈良時代に中国から渡ってきた民間芸能「散楽」が発展したもので、「散楽」がなまって「さるがく」となりました。宮廷や社寺のお祭りの際に歌舞や曲芸、滑稽な物まねなどが演じられていました。「猿」の字が使われるようになったのは平安時代以降のことです。その後、鎌倉時代に歌舞劇としての「能」、台詞劇としての「狂言」に分か

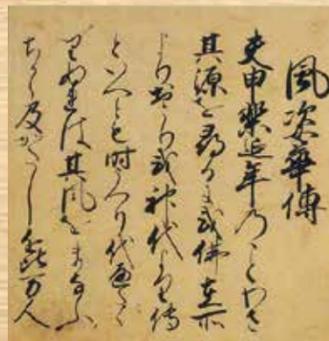


奈良春日野国際フォーラム「葦・RA・KA」能楽ホール

れ、明治時代に「能楽」と呼ばれるようになります。奈良県はこの「猿楽」「能楽」発祥の地。大淀町松垣本の地にもこの「猿楽」を演じる一座が存在していました。

大和猿楽から現れた名手、観阿弥。
総合芸術に高めた天才少年、世阿弥の登場。

その名は「松垣本猿楽座」。室町時代から江戸時代にかけての約 300 年間、大和四座(観世座・宝生座・金春座・金剛座)とともに活躍していた吉野猿楽(松垣本猿楽座・柳原猿楽座・巳野座・延命太夫座・宇治猿楽座)の一つとして「能」の歴史の中で大切な役割を果たします。大和四座の観世座からは優美な舞、新たな音曲を取り入れた演出で人気を集めた名手、観阿弥が生まれます。その息子が、世阿弥です。わずか 12 歳のとき、美しい姿、演技で將軍、足利義満の目にとまった天才少年でした。世阿弥は、猿楽の能を、より洗練された仮面劇・歌舞劇、幽玄な「夢幻能」として大成させ、その芸術性を確立しました。隠して秘密にするからこそ、観客を感動させられる「秘すれば花なり」などの奥深い芸



生駒山寶山寺所蔵「風姿花伝」(金春本)



国立能楽堂提供:『能之図(上)』より「能高砂」

術論を記した『風姿花伝』の著者、理論家として、また有名な「高砂」などの作者としても名を残します。しかし、世阿弥以降、猿楽の能は、室町幕府や社寺の弱体化とともに次第に衰退。新たな時代の訪れを待つことになります。

織田信長、豊臣秀吉、徳川家康。
時の権力者が「能」を愛した理由。



織田信長
所蔵者 長興寺、
写真協力 豊田市郷土資料館



豊臣秀吉
高台寺所蔵



徳川家康
写真提供 名古屋博物館

そして世は戦国時代へ。16 世紀後半、能役者は有名大名を頼って全国各地に散らばります。なかでも、多趣味だった織田信長は、武家の教養として「能」に対しても好意的だったといわれています。豊臣秀吉は自身でも好んで「能」を舞うほどの熱狂的な愛好家でした。天正 16 年(1588)、秀吉が聚楽第に後陽成天皇を招いて開催した「天覧能」の華やかな様子は「観能図屏風」に描かれています。観客には西洋人の姿も見られ、秀吉らしい趣向が感じられます。その頃、大和四座には扶持米(給与)が与えられていました。豪華絢爛な桃山文化が開いたこの時期、能舞台や装束もそ

の影響を受けます。「能」は復興期であり、大きな転換期を迎えたのです。現代にも名を残す能面作者の名手も登場。また、演出や詞章についてもより洗練されてゆきます。秀吉の没後は、征夷大將軍となり、江戸幕府を開いた徳川家康が「能」を保護します。江戸時代の初期には、宮中の「雅楽」に対して、大和四座に喜多流を加えた四座一流を幕府の「式楽(儀式用の公式芸能)」と定め、武士的な身分を保証しました。しかし、幕府のお抱えとなることで、格式が重んじられるようになり、幕府や諸大名は、保護という名のもとに「能」を厳しく管理・監督し始めます。その結果、保守的な傾向が強まり、演目も固定化。自由な発展性が閉ざされてしまいます。一方で、町人の間に謡曲が普及したことによって、「謡」が全国的に広まりました。そして、明治維新によって「式楽」という職を失った能役者は、冬の時代を迎えます。第二次世界大戦後の混乱期にも、存亡の危機にさらされました。しかし、その時々、「能楽」を愛する多くの人々の支えと、戦後は、流派を超えた関係者の努力により再生、復興。海外公演も開催されるようになり、ユネスコの無形文化遺産に登録されることになります。



神戸市立博物館蔵「観能図屏風」

室町時代から大淀町松垣本に存在した 吉野猿楽「松垣本猿楽座」とは？

「松垣本猿楽座」は室町時代、大淀町松垣本を拠点に関西・北陸地方を中心に幅広い活動を続けていました。起源については、はっきりとはわかっていませんが、最も古い記録は、応永11年(1404)4月1日、春日大社への参殿。『春日若宮神主祐光日記』に記されている「吉野猿楽」の一座が、後の「松垣本猿楽座」だとされています。世阿弥が『風姿花伝』を世に出した時代です。吉野山の吉水神社に現存する面打ち名人、松垣本七郎(P5・6参照)の作品も、「松垣本猿楽座」の活躍を裏付ける歴史的資料です。観世座(現在の観世流)とは縁戚関係にあり、寛正6年(1465)の『雲上散楽会宴』には、一族と思われ

る美濃与五郎吉久と観世太夫が共演したという記述があります。この「松垣本猿楽座」は囃子方に優れた人物を数多く輩出し、特に笛方、太鼓方の芸祖を生み出します。笛の名手として知られているのが松垣本彦四郎。後に彦兵衛と改名し、その名は、笛方の家を継承する能楽者の誇り高い通称として受け継がれていきます。伝書『童吟秘訣』や『笛集』は松垣本彦四郎、彦兵衛いずれかの時代の作とされています。室町時代の終わりに登場するのが、太鼓の名人である次郎太夫国忠・与左衛門国広父子です。国広は、織田信長とも縁を持ち、多くの弟子を指導。この太鼓の芸系は、現在の太鼓観世家につながります。



第11回松垣本大淀町公演・能「土蜘蛛」

吉野山、金峯山寺蔵王堂の境内で 「猿楽」が演じられた記録が残る。



松垣本八幡神社

応永年間(1394-1427)以降、吉野山の金峯山寺蔵王堂の天満神社(現 威徳天満宮)で営まれた野際会(のぎわい)で「松垣本猿楽座」が楽頭として演じたという記録が残っています。正月18日の上社(現 吉野水分神社)と同23日の下社(現 勝手神社)の御田でも「猿楽」が行われていました。現在、吉野水分神社の御田植神事において翁面を使

用する狂言系の御田が伝承されていることもこうした歴史に照らし合わせると偶然とはいえません。また、この地には、後醍醐天皇が行幸したと伝わる松垣本八幡神社があり、後醍醐天皇を祭神とする境外社、松垣本森神社は応永22年(1415)創建と伝えます。いずれも、「松垣本猿楽座」の活躍時期と重なり、深い関係がうかがい知れます。



松垣本森神社

松垣本猿楽座

本拠地を江戸に移し 活躍の場を全国へ。 さらなる芸術性を高める。



室町時代から約300年間、松垣本を拠点に各地で活躍していた「松垣本猿楽座」。江戸幕府による大和四座への芸能統制が強まり、一族をあげて江戸に赴くこととなります。そして、縁戚関係にあった観世座の名字の使用を許され、座の一員として芸術性を高めていきます。その一方で、吉野との縁は途絶えることになり、地元では忘れられた存在になっていました。

大淀町の貴重な文化財産として 後世に伝えるための 活動がはじまる。



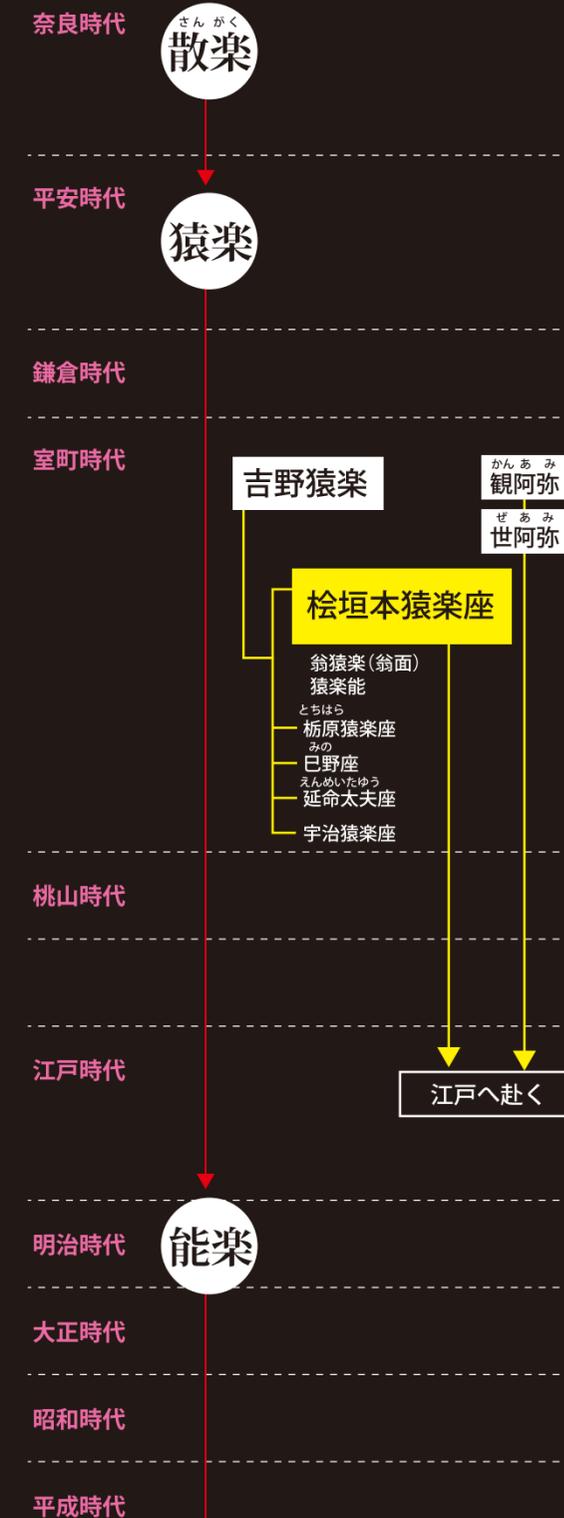
ちびっこ能楽体験



ちびっこ松垣本座

大淀町の「松垣本猿楽座」復興のきっかけとなったのは、平成12年(2000)、この地を訪れた能楽小鼓方太倉流宗家、太倉源次郎師との出会いでした。「私はずっと「松垣本」を探していました。『松垣本』は能楽師にとって、とても大切なところなんです。」そして、翌年の「吉野魅惑体験フェスティバル」で「松垣本猿楽座」をとり上げ「能楽座公演」や「ワークショップ」を開催。町内外に、先人の業績、歴史的、文化的意義を紹介しました。これを機に現在まで、「松垣本猿楽座」を大淀町の文化財産、郷土の誇りとして、後世に引き継ぐ事業を展開しています。

散楽から能楽への流れ



なるほど、そうなんだ！

面打ち名人、**松垣本七郎**の作品を見てみよう。

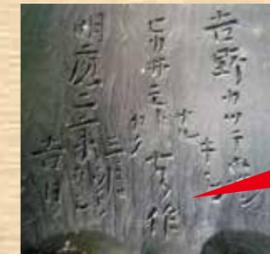
猿楽を演じる一方で面を打った松垣本七郎。
その作品は能面の様式が確立する以前の能面として知られています。

もともと天下泰平、五穀豊穡を祈る祭りの中で、神に扮するために用いられた仮面が能面の始まり。それが、仮面劇としての幽玄美を求め、世阿弥の時代に洗練され、華やかな桃山時代に現在の様式が形づくられます。能面には魂が宿っているといわれ、特別な道具として、今日まで大切に扱われてきました。その歴史の中で、名人ともいえる面打ちが「**松垣本猿楽座**」にいま

した。自ら能楽も演じたといわれる「**松垣本七郎**」。15世紀から16世紀にかけて、数々の名作を残しています。三重県鳥羽市の賀多神社の「孫次郎」、スイスのチューリッヒ・リートベルク美術館の「小喝食」なども、近年の研究により七郎作だと考えられています。能面の様式が確立する以前の自由な作風。その資料的価値とともに、美術品としての価値も高く評価されています。



若い女(面裏・上部)



若い男(面裏・上部と七郎作の銘の拡大)



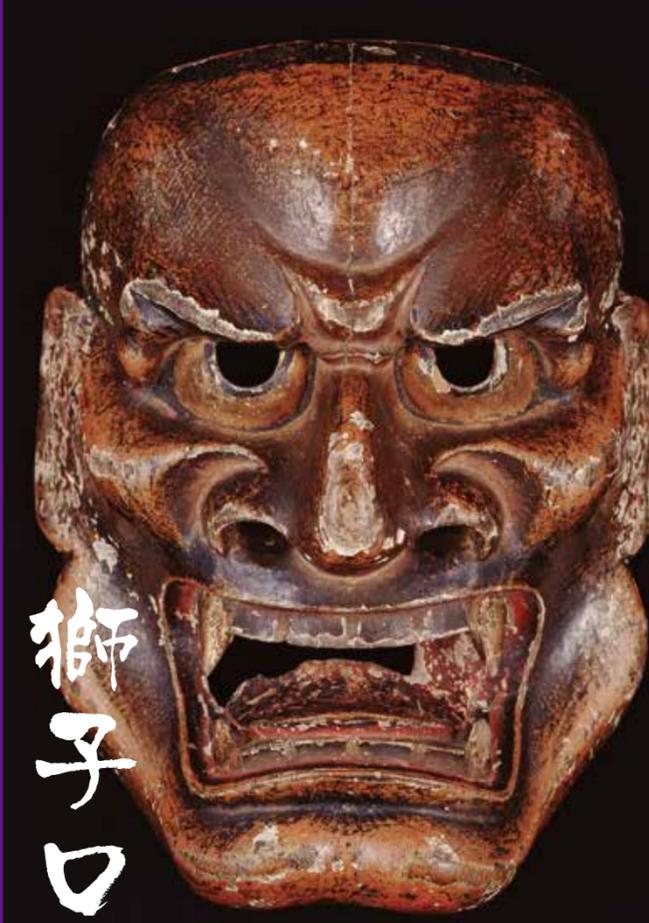
若い男(面裏・下部)



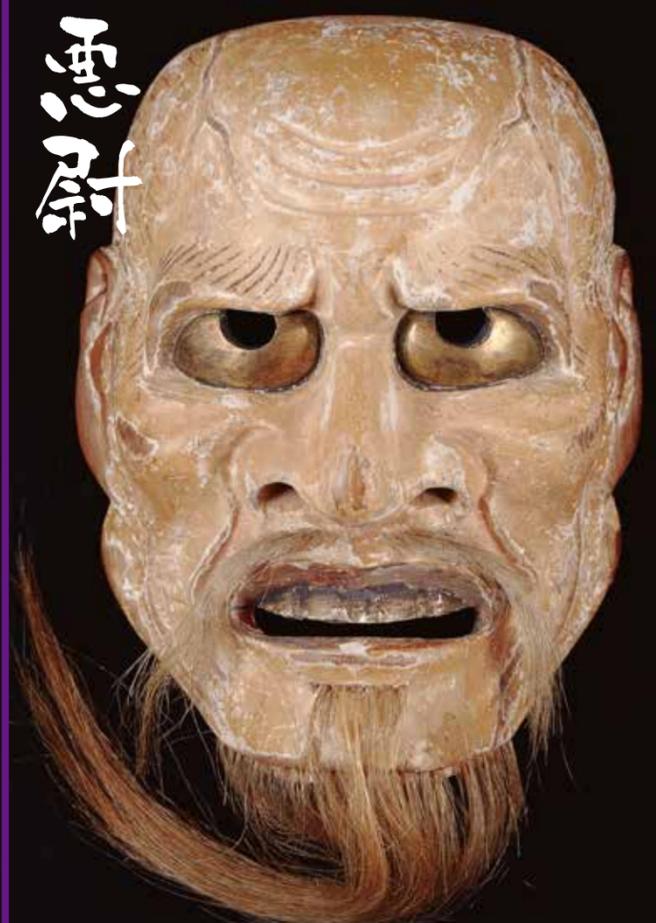
若い女



若い男



獅子口



悪尉

若い女(わかいおんな)

21.1×14.1cm 桧材彩色 明応2年(1493)
吉野町吉野山 勝手神社(現在は吉水神社所蔵)

面裏の刻銘から、明応2年、松垣本七郎が製作し、信家という人物が吉野守御前(吉野水分神社)へ寄進したものであることがわかる。その後、江戸時代には勝手神社の所蔵となり、紆余曲折を経て現存する貴重な面である。



若い男(わかいおとこ)

20.7×14.4cm 桧材彩色 明応2年(1493)
吉野町吉野山 勝手神社(現在は吉水神社所蔵)

若い女と同じように、「ヒカ井モト七郎作」の刻銘がある。(若い女は「井」の字が異なり「ヒカキモト」)。さらに「吉野カツテ御センキシン」の文字も読み取れる。松垣本七郎作のこの面も、信家という人物が、明応2年に吉野勝手御前(勝手神社)へ寄進したものである。信家という人物についての記録は伝わっていないが、七郎本人だとする説もある。

獅子口(ししぐち)

21.3×16.6cm 桧材彩色 室町時代
和歌山県九度山町 河根丹生神社(和歌山県立博物館寄託/和歌山県指定文化財)

高野街道沿いの河根丹生神社に伝来したもの。慶長13年(1608)まで河根の近隣で、翁舞を行っていた松垣本猿楽がこの地にもたらしたと考えられている。面裏に「ヤマト七郎作」の刻銘がある。昭和初期まで雨乞いのための笠鉦という神事に登場する鬼の面として使用されており、笠鉦面と鬼面の異名もこれに由来していると思われる。

悪尉(あくじょう)

20.6×16.6cm 桧材彩色 室町時代
石川県金沢市 尾山神社(金沢市指定文化財)

面裏に「ヤマトヒカ井モト七郎作」の刻銘がある。この面には、能登の海で謡い声を発して、夜になると光り輝き、口から泡を吹いていたという伝説が残されており、「淡吹」の通称がある。その海中から拾い上げられ、加賀藩主、前田利常に献上され、後に、藩祖・前田利家をまつる尾山神社へ奉納されたという。松垣本猿楽が北陸にまで活動の範囲を広げていた証ともいえる面。

なるほど、そうなんだ！

松垣本猿楽座が、芸祖といわれる 能楽囃子方って？



囃子方とは、能楽の楽器を担当する専門職です。
四拍子それぞれの演奏者である笛方、小鼓方、大鼓方、太鼓方によって構成されています。
一人一芸の分業制度が守られ、他の楽器演奏を兼ねることはありません。
この笛方、太鼓方の歴史をさかのぼれば、「松垣本猿楽座」にたどり着きます。

彦四郎、彦兵衛など「彦」を通字とする能楽者は、代々、笛の名手として知られていました。

現在の笛方三流儀(一噌流・森田流・藤田流)の芸祖とされるのが松垣本猿楽座の「彦四郎」です。文明3年(1471)奈良・興福寺(大乘院)の僧侶、尋尊を吉野の「彦四郎」が訪れたという記録があります。後の時代の記録には「猿楽」という注記も見られ、「笛も彦四良上手」と記された書物も残されています。その後、能楽史に名を刻む「彦兵衛」に改名。「松垣本猿楽座」には「彦」を通字とする能楽者が代々続き、笛の名手として知られていました。その芸の流れが、「彦兵衛」の名前とともに、現在まで、しっかりとつながっているのです。



父の芸を受け継いだ太鼓の名手、与左衛門国広。弟子の育成にも尽力しました。

「彦四郎」の父とも伝わる美濃(松垣本)姓を名乗った「吉久」は、観世、金春の小鼓方をつとめていました。その子とされるのが太鼓の名手「国忠」です。太鼓観世家に伝わる太鼓胴には「観世座次郎太夫国忠 天文4年(1535)」の銘が刻まれています。「国忠」の芸系が、現在の名門家に受け継がれているのです。その子「与左衛門国広」も父の芸を受け継ぎ、京都の芸壇で活躍し、多くの伝書を残します。この時代きっての文化人、細川幽斎の師匠となり、弟子の一人、越前国(今の福井県)北の庄の豪商、田那部藤九郎に与えた太鼓胴などが地元で発見されています。



能楽で使われる楽器たち

笛



「能管」ともいう横笛。唯一のメロディ楽器で、一本一本、微妙に音律が異なる。長さ約39cm。燻された爆竹を材料とし、漆を塗り込め樺や籐などが巻かれている。オクターブの音階が出る。

小鼓



馬の革と桜の胴。柔らかな音から硬い音まで様々な音色が出せ、女性的な楽器といわれる。湿度の変化にデリケートで、天気により音が変化する。演奏中に革に息をかけたりに調整する。

大鼓



硬く高い音で囃子方をリードする。その音を出すために、革を炭火で乾燥させ、さらに強く締め上げる。強い衝撃から右手を守るために、指や手のひらに当て具をつけることもある。

太鼓



牛の表革の中心に直径4cmほどの鹿革を貼る。この「バチ革」の部分、両手に持ったバチで打ち、音を出す。打つ力の強弱やバチの扱いなどによって音色を変える。演奏姿も華やか。

椀垣本猿楽座・大淀町への 思い。

ふえかた 藤方藤田流十一世宗家・藤田六郎兵衛師、こつみかた 小鼓方大倉流十六世宗家・大倉源次郎師。椀垣本猿楽座の系譜を受け継ぐ両氏との出会い、両宗家の尽力に支えられ、椀垣本猿楽座は現代の世で、再び光を放ち始めました。



藤田六郎兵衛 ● 椀方藤田流十一世宗家

歴史を生きている

子どもの時から「椀垣本彦兵衛栄次」や「彦兵衛」の名前には馴染みがあった。先代家元である父の晩酌に付き合っていると、藤田流の歴史や芸の話をよくしてくれた。笛の稽古とは別の「補習授業」である。その時間は私の私にとって大切な宝物の。彦兵衛から藤田流にどう伝わってきたのか。そして現在の椀方三流、藤田流・一噌流・森田流はすべて「彦兵衛」を師とする、と教わった。

後年、我が家の古文書を見ていると、表装していない巻物一巻に目が止まった。表に小さく「彦兵衛 笛之書」と書かれている。およそ 500 年前の伝書である。「脇能之次第」と書き出されるこの書には、脇能「高砂」を演奏する時の心得が、彦兵衛自筆で記されている。現代の能にも通用する教えた。

十数年前、小鼓の大倉氏より、その彦兵衛がいた椀垣本座が現在の椀垣町であると知らされ、早速二人で訪問することになった。まずは椀垣町の方々に「椀垣本座」とは何か、そしてその事が、能楽の世界だけでなく日本の歴史上、いかに大切に重要な発見であるかを理解していただくには時間がかかった。

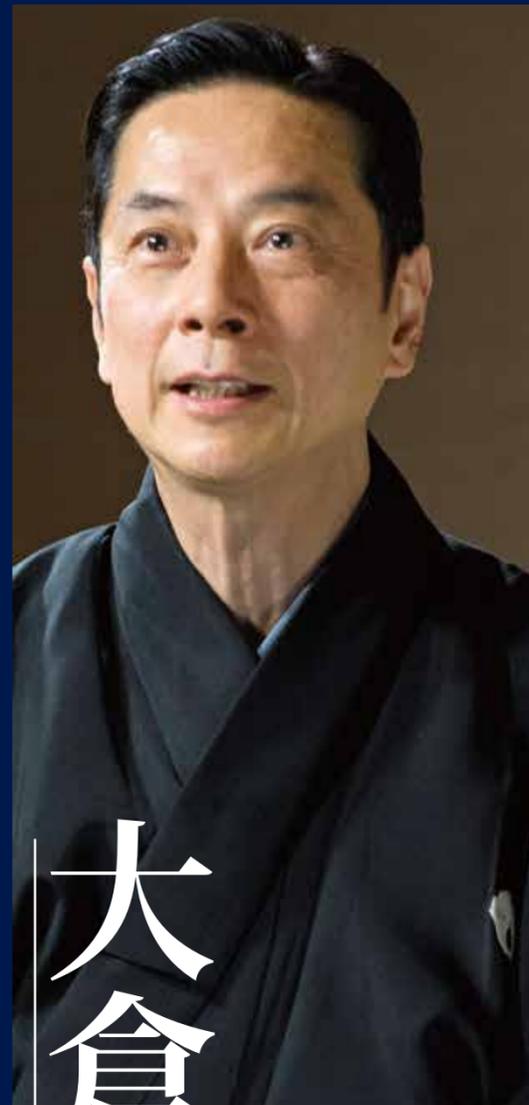
能が頻りに上演される地域ではなく、ましてや見る機会もほとんどない椀垣町の人たちに、「あなたの町に、こんなすごい財産が眠っている。大切にしないで」と、突然現れたよそ者に熱く語られても、戸惑われたらうなど、今では思っている。

皆さんの理解を得て、能の講座を重ね、年一回の能・狂言の上演にこぎつけ、それが子どもたちの能楽体験に結び付いた。言葉にすればスムーズに聞こえそうだが、これらの仕組みを作っていたくには、関係者の大変な協力と努力があった。

無形の文化遺産の価値にはなかなか気づかないものだ。太陽や空気の大切さに気づかずに生きているのと同じように、身近にあるものに価値を見出すことは難しい。日本中と同じ品を揃えたコンビニがあり、東京でも離島でも、インターネットで同じ情報を得ることの出来る時代にあって、その土地にしかないものがいかに大切か。ましてやそれに価値がある、という感覚を持つことは難しい。

椀垣町で謡や舞、小鼓や太鼓に触れた子どもたち。日本の文化でありながら、そんな体験を持つ子は日本中に何人いるだろう。それも、能のふるさとに住んでそれを体験する。こんな素晴らしいことがあるだろうか。

椀垣町の皆さんには、「歴史を生きている」という思いを胸に、「椀垣本」という言葉を大切にしていきたいと願っている。



大倉源次郎 ● 小鼓方大倉流十六世宗家

大淀町能楽プログラムに期待する

15 世紀、大淀町(椀垣本)には能楽の囃子の元となる人たちが住まっていた。能楽は江戸時代に生まれた人形浄瑠璃(文楽)、歌舞伎、日本舞踊などにも影響を与えたので現在の伝統的な音楽の基本を作った人たちが大淀町の地を舞台に活動していたのです。

勿論、大淀の地でいきなりボンと生まれた訳では無く、そこに至る歴史のドラマがあります。日本という国家が形成されたヤマトの地は「大和」と書く字の通り、多民族の集まりであり様々な音楽や宗教の垣塙でした。厳しくも豊かな四季を持つ大和盆地の自然は南方、北方、そして狩猟、定着農法の良い文化を持ち寄り、協力させるに足る出会いと時間をもちらせ、それらの成果として奇跡的な音楽の発達が起こったのです。

先ずはその編成です。笛は大陸から伝来した篳篥、横笛をベースに古代の「石笛」の調子が出るように工夫がされ、他の三つの打楽器である、小鼓、大鼓、太鼓はそれぞれデザインコンセプトが南方系(小鼓)、朝鮮半島(大鼓)、唐(太鼓)と伝来背景を異にしています。また、音に対する考え方がいつの頃からか逆説的になり、音を出す為に音を出すのではなく「間」がある事を知らせる為に音を出すという哲学的な発想の元に楽曲が再構成されました。

世阿弥は「一調、二機、三声」と声を出す時の心得を説き、声を出すにはまず調子を整える。次に間合いを図る。そして声を出せという内容です。逆にいうと声を出せるのは当たりまえ。大事なのは声を出すまでの「間」と「調子」なのだということです。

また、音色も只綺麗な音色では無く世阿弥の説く芸風として言い換えれば「巖に花が咲かんが如し」「枯れ木に花が咲く」など背景に潜む面白さを見つけ出す感性が大切だとしています。三間四方の『本舞台』に『橋掛り』と『鏡の間』を持つ劇場建築である能舞台に、『未来』『現在』『過去』の『神、男、女、狂、鬼』という多様なキャラクター達が、現界、霊界を自由に行き来し、『能』と『狂言』という異なる視座で『人』『神』『仏』の世界を自在に描く舞台芸術が「能楽」です。

一つでも二つでも体験して下さい、能との出会いは私達の日常に、人を育てる芸術の意味、それは大切な「間」を埋める「心」を育てる機会になる筈です。多様性を認める事から始める世界の平和は大和で生まれた能に出会う事から始まると信じます。大淀町の文化力に強く期待します。

ふじたるくるびょうえ

経歴

1953 年名古屋市生まれ。1960 年一管「中之舞」にて初舞台。1980 年藤田流宗家を継承。1982 年家名「六郎兵衛」を襲名。2011 年文化庁芸術祭大賞、観世寿夫記念法政大学能楽賞。2012 年中日文化賞を受賞。愛・地球博「咲き誇る伝統」の総合演出を務める。名古屋音楽大学客員教授、2015 年度文化庁「文化交流使」、重要無形文化財(能楽)総合指定保持者。

おおくら げんじろう

経歴

1957 年大阪府生まれ。十五世宗家大倉長十郎の次男。父に師事。1965 年独鼓「鮎の段」で初舞台。1985 年大倉流宗家を継承。通常の能公演はもとより、「能楽堂を出た能」をプロデュースし、企画・演出・講演など、精力的な活動を行っている。2001 年には奈良県大淀町にて、いにしへの猿楽座「椀垣本猿楽座」を顕彰する能を「能楽座」として制作し、翌 2002 年ちびっ子椀垣本座を創設する。重要無形文化財(能楽)総合指定保持者。

ふるさとの文化を、次の世代へ。体験することで理解する大淀町能楽プログラム。

平成 13 年夏、「吉野魅惑体験フェスティバル」で「ひ かい もと ざる がく 桧垣本猿楽」をとり上げ、大淀町の歴史、先人の活躍を見直す取り組みが始まりました。

ワークショップ アウトリーチ

だれもが気軽に能楽の魅力、楽しさを体験、体感できる。

気軽に質問しながら能の謡、うたい ふえ こつづみ おおつづみ たいこ 笛、小鼓、大鼓、太鼓などが体験できる「ワークショップ」。各分野の先生方に講師を務めていただく「アウトリーチ(出前講座)」も継続して開催。身近な「文化財産」としての継承に取り組んでいます。



能面と装束のお話(町文化会館)



謡と小鼓の体験(町文化会館)



留学生が小鼓を体験(世尊寺)



舞の基本「すり足」を体験(町文化会館)



狂言アウトリーチ(泉徳寺)



対談「能楽と修験」(町文化会館)



笛と小鼓の体験(世尊寺)

ちびっ子 能楽 体験

ふるさとの町の歴史や文化を次の世代に伝えるために、毎年町内全小学校で実施している「ちびっ子能楽体験」。

「桧垣本猿楽」の歴史を再認識し、長く、深く地域に根付かせていくためには幼い頃から楽しく能楽に触れることが大切と考え、小学校で能楽体験を実施しています。この取り組みは、親や大人からも興味を得ることにつながっています。大淀町内の小学3年生の社会科副読本には「桧垣本猿楽」が掲載されています。



大淀町の「文化財産」の復活を目指して活動を続け、各地の舞台での公演経験も重ねる「ちびっ子桧垣本座」。

体験講座で能楽に興味をもち、もっと勉強したいと感じた子どもたちのために、大倉源次郎師の監修と能楽協会大阪支部教育特別委員会の協力により、平成14年(2002)「ちびっ子桧垣本座」を創座。公演を通じて、町外各地との文化交流にも貢献しています。

ちびっ子 桧垣本座



大淀町能楽プログラムの歩み

平成13年(2001)からスタートした「能楽座大淀町公演」「ワークショップ・アウトリーチ」「ちびっ子能楽体験」「ちびっ子能楽本座」「大和猿楽子どもフェスティバル」などの大淀町能楽プログラム。地域の「文化財産」が日常生活の中で、多くの人々に愛されながら、受け継がれることを目指して、新たな歴史を積み重ねています。



能楽座大淀町公演
世阿弥生誕650年記念 スーパー能「世阿弥」



ひがいもとしちろう
榎垣本七郎作 能面特別展示



スーパー能「世阿弥」世阿弥と寿椿
じゅちん



ふえかた
笛方三流儀里帰り公演



あたか
能「安宅」



こつみかた
小鼓方四流儀里帰り公演



能「高砂」尉と姥



ぼうしぼり
狂言「棒縛」



能「高砂」住吉明神



大倉源次郎師、藤田六郎兵衛師、大槻文蔵師



大倉源次郎師、藤田六郎兵衛師



榎垣本八幡神社にて

平成27年度	平成26年度	平成25年度	平成24年度	平成23年度	平成22年度	平成21年度	平成20年度	平成19年度	平成18年度	平成17年度	平成16年度	平成15年度	平成14年度	平成13年度
<ul style="list-style-type: none"> ○ちびっ子能楽体験 ○第14期ちびっ子榎垣本座 ○能楽ワークショップ「面があれば裏があるパート5」 ○第15回能楽座大淀町公演 ○小鼓方四流儀里帰り公演 狂言「文蔵」茂山正邦 能「高砂」大槻文蔵 ○能楽アウトリーチ「狂言」 ○第14回大和猿楽子どもフェスティバル(9団体) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ちびっ子能楽体験 ○第13期ちびっ子榎垣本座 ○「第34回全国豊かな海づくり大会」やまとくに参加 ○第14回能楽座大淀町公演 ○狂言「棒縛」小笠原匡 能「安宅」大槻文蔵 ○能楽ワークショップ「面があれば裏があるパート4」 ○能楽アウトリーチ「狂言」 ○第13回大和猿楽子どもフェスティバル(8団体) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ちびっ子能楽体験 ○第12期ちびっ子榎垣本座 ○「第2回奈良古典芸能フェスティバル」唐招提寺鑑真和上1250年御遠忌に参加 ○能楽ワークショップ「面があれば裏があるパート3」 ○第13回能楽座大淀町公演 ○梅原猛作スーパー能「世阿弥」梅若玄祥 ○能楽アウトリーチ「狂言」 ○第12回大和猿楽子どもフェスティバル(7団体) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ちびっ子能楽体験 ○第11期ちびっ子榎垣本座 ○天和大井財神社能舞台で演奏 ○第12回能楽座大淀町公演 ○狂言「秋大名」野村万禄 能「俊寛」大槻文蔵 ○能楽アウトリーチ「小鼓、狂言」(全2回) ○第11回大和猿楽子どもフェスティバル(7団体) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ちびっ子能楽体験 ○第10期ちびっ子榎垣本座 ○「第26回国民文化祭」京都2011能楽の祭典」に参加 ○第11回能楽座大淀町公演 ○狂言「附子」ふす(茂山千三郎) 能「土蜘蛛」大槻文蔵 ○能楽アウトリーチ「小鼓、狂言」(全2回) ○楽しんでお囃子の世界 ○第10回大和猿楽子どもフェスティバル(6団体) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ちびっ子能楽体験 ○第9期ちびっ子榎垣本座 ○吉野山「金峯山寺蔵王権現特別開扉前夜祭」に参加 ○能楽アウトリーチ「能楽」おもしろいで(全3回) ○第10回能楽座大淀町公演 ○狂言「蛸子」かぎゆう(茂山千三郎) 能「国栖」くす(大槻文蔵) ○楽しんでお囃子の世界 ○第9回大和猿楽子どもフェスティバル(8団体) 	<ul style="list-style-type: none"> ○「ユネスコ東アジア子ども芸術祭」奈良と共に生きることを学ぶ」参加 ○第9回能楽座大淀町公演 ○狂言「口真似」茂山忠三郎 能「隅田川」大槻文蔵 ○第8回大和猿楽子どもフェスティバル(9団体) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ちびっ子能楽体験 ○第7期ちびっ子榎垣本座 ○平成20年度文化庁委託事業「伝統文化子ども教室」事例集に掲載 ○第8回能楽座大淀町公演 ○狂言「因幡堂」いなばどう(茂山千三郎) 能「俊寛」しゅんかん(大槻文蔵) ○第7回大和猿楽子どもフェスティバル(12団体) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ちびっ子能楽体験 ○第6期ちびっ子榎垣本座 ○東大寺大仏殿須彌壇で演奏 ○第7回能楽座大淀町公演 ○狂言「鳴子」なるこ(茂山千三郎) 能「天鼓」大槻文蔵 ○第6回大和猿楽子どもフェスティバル(12団体) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ちびっ子能楽体験 ○第5期ちびっ子榎垣本座 ○県政広報番組「情報！奈良チャンネル」取材 ○能楽ワークショップ(全3回) ○第6回能楽座大淀町公演 ○狂言「寝音曲」ねおんぎよく(茂山千三郎) 能「清経」きよつね(観世榮夫) ○第4回大和猿楽子どもフェスティバル(8団体) ○第5回大和猿楽子どもフェスティバル(7団体) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ちびっ子能楽体験 ○第4期ちびっ子榎垣本座 ○第5回能楽座大淀町公演 ○狂言「仙師」茂山千三郎 能「紅葉狩」大槻文蔵 ○第3回大和猿楽子どもフェスティバル(8団体) ○第4回大和猿楽子どもフェスティバル(8団体) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ちびっ子能楽体験 ○第3期ちびっ子榎垣本座 ○「紀伊半島民俗芸能祭2014」参加 ○能楽ワークショップ「続」面があれば裏がある(全2回) ○第4回能楽座大淀町公演 ○狂言「素袍落」すおのおとし(茂山千三郎) 能「鞍馬天狗」大槻文蔵 ○第3回大和猿楽子どもフェスティバル(7団体) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ちびっ子能楽体験 ○第2期ちびっ子榎垣本座 ○NHK奈良放送局「ニュースなら630」に出演 ○第3回能楽座大淀町公演 ○狂言「佐渡狐」野村万作 能「船弁慶」ふなべんけい(観世榮夫、大槻文蔵) ○第1回大和猿楽子どもフェスティバル(7団体) ○第2回大和猿楽子どもフェスティバル(7団体) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ちびっ子能楽体験(町内全小学校) ○狂言「能面」能「小鼓」大鼓、大鼓を体験 ○小鼓方大倉流十六世宗家大倉源次郎師の監修により創座 ○第2回能楽座大淀町公演 ○奈良県能楽サミット開催提唱「広めよう能楽の輪」大和の国から世界へ」 ○平成14年度地域づくり総務大臣賞受賞 ○第1回大和猿楽子どもフェスティバル(5団体) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ワークショップ「SARUGAKU」榎垣本座(全3回) ○第1回能楽座「SARUGAKU」榎垣本座 ○能「土蜘蛛」つちくも(大槻文蔵、茂山千三郎)

Q1. 「能」と「能楽」は同じなのですか？

A. 同じではありません。室町時代に成立した日本の伝統芸能「能」と「狂言」をあわせて「能楽」といいます。

Q2. 能楽師にはどんな役割がありますか？

A. 能では主役のことをシテといい、シテと応対してその演技を引出す役をワキと呼びます。シテを演じ地謡を担当するのは「シテ方」です。ほかに、ワキ方、狂言方、囃子方として笛方、小鼓方、大鼓方、太鼓方の全部で7つあります。それぞれが専門職で「役籍」といわれます。

Q3. なぜ面をつけるのですか？

A. 能は仮面劇。シテ方だけが能面をかけます。能楽師は昭和以前は男性だけでした。役柄は男、女、神、化身などいろいろあります。そのためシテは能面をかけて幅広い役で多種多様な世界観を演じます。素顔で演じることもあり、直面といえます。演目では「安宅」がそうです。

Q7. 「能」の公演は何分くらいですか？

A. 曲目によってかなり違います。一曲の長さは短いもので50分、長いものは100分以上のものもあります。狂言は短いもので15分、長いもので45分ほどです。

Q8. 能の物語がわからなくても、楽しめますか？

A. 無理に内容を理解する必要はありません。面や装束や作り物をチェックしたり、シテやワキの動きを絵として鑑賞したり、謡や囃子の生演奏をBGMとして聞いてみるなど自由に雰囲気を楽しんでください。

Q11. 「能」の流派とはなんですか？

A. シテ方、ワキ方、笛方、小鼓方、大鼓方、太鼓方、狂言方の各役籍はさらに複数の流派（あるいは流儀）にわかれます。シテ方5流、ワキ方3流、笛方3流、小鼓方4流、大鼓方5流、太鼓方2流、狂言方2流があります。

Q12. 能装束ってなんですか？

A. 能の舞台衣裳のことです。衣裳だけでなくカツラや冠など面以外の扮装用具をすべて装束と呼びます。色や模様を織り出したもの、刺繍や金箔・銀箔で描いたものなど、華やかで手が込んだ意匠が表現されています。役柄の性別・年齢・身分・職業などにより着ける装束が異なります。

Q13. 「新能」って何ですか？

A. 新能は、主として夏場の夜間、神社仏閣、御苑、城跡など、かがり火を焚くことができる場所で行う能や狂言の舞台公演のことです。野外という解放感からか、堅苦しさがなく、能に慣れていない方でも気軽に楽しめます。奈良市の興福寺で最初に催されました。ちなみに興福寺の新能は「薪御能(たきぎおのう)」と呼ばれます。

Q4. 能はどうしてあまり動かないのですか？

A. 能は「引き算の芸術」といわれています。人間の葛藤や喜怒哀楽の本質を研ぎ澄まし、これ以上省略できないほど簡素な所作で表現しています。たとえ立っているだけでも、そこには日常的な動作とは異なる特殊な身体使い方があって、強い力と緊張が働いています。

Q5. 「能」の楽器はだれでも音を出せますか？

A. 能は笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類の楽器（お道具）が使われます。どの楽器も最初は口でうたう唱歌で旋律を覚えます。笛は息の吹きかけが難しいです。小鼓は指1本で打つこともあります。大鼓は皮を焙じて乾燥させているので打つととても痛いんです。太鼓はバチで打つので音は出せますが、練習をしないと良い音は出せません。

Q6. 初心者におすすめの演目はありますか？

A. 源頼光の武勇伝を題材にした「土蜘蛛」です。ストーリーが単純で躍動感があり、蜘蛛の糸を用いるので娯楽的要素もあって初心者の人でもわかりやすいです。「船弁慶」「安宅」もおすすめです。

Q9. 舞台ではどんな道具が使われますか？

A. 扇は欠かせない道具です。曲によって鐘、蜘蛛の巣など作り物と呼ばれる簡単な舞台装置を用いたり、腰掛の鬘桶、数珠、刀、傘などの小道具を使用することもあります。

Q10. 能舞台の基本を教えてください。

A. 能舞台に幕はありません。客席の中に突き出た約6メートル四方の舞台空間と橋掛かり、そして舞台の奥の鏡板に描かれた「古い松」が背景にあるだけです。

Q14. どんな登場人物がいるのですか？

A. 現実の人間ばかりでなく、動物の化身、亡霊や鬼、植物の化身など、超自然的な霊的な力をもつものが数多く登場します。

Q15. 「能」はどこで見られますか？

A. 日本各地にある能楽堂で見ることができます。また、各地のホール等でも観覧できます。インターネットで演能の情報を発信していることが多いので、「地名(場所名) 能楽 公演」で検索してみてください。

Q16. どんな演目が有名ですか？

A. 披露宴でよく謡われた祝言曲の「高砂」、三保の松原の羽衣伝説の「羽衣」、鬼界島に流された「俊寛」、女の怨念「道成寺」などです。

みんなで楽しく鑑賞しよう！

能楽

Q&A



「能楽」は、むずかしくないよ。
体験すると、もっとおもしろい。



お祝いの謡曲「高砂」待謡

高砂
この浦舟に帆をあげて
ともに出帆の波の淡路の
船影や遠く鳴尾の伴を
はや住吉に着きにけり
任心にまきにけり

「高砂」の待謡は、昔から結婚式などのおめでたい席で謡われています。月夜に兵庫県高砂市から舟に乗って出発、途中で淡路島を眺め、鳴尾浜(甲子園)を通って大阪の住吉に着いた様子を謡っています。抑揚をつけて謡ってみてください。

たかさごや。
このうらぶねに 帆をあげて——。
このうらぶねに 帆をあげて。つきもるともに いてしおの。
なみのあわしの しまかげや。
とおくなるおの おさずきて はアや すみのオえに。
つきにけり はア みのえに つきにけり——。



繪畫店発行 観世流大成版謡本(高砂)より
繪畫店 http://www.hinoki-shoten.co.jp/

小鼓の構え方を体験しましょう。

小鼓がなくても大丈夫！エアー小鼓で！



- ①まず正座をしてください。
- ②小鼓を構えるには、左手をまっすぐ前に出して、「ゲー」に握ってください。
- ③そのまま「ゲー」を右肩にあててください。
- ④小鼓の音は4種類(チ・タ・プ・ポ)あります。
- ⑤一番大きな「ポ」の音をやってみましょう。
- ⑥右手は「パー」にして、左手の「ゲー」にあててください。
- ⑦右手の「パー」を膝のあたりまでおろしてください。
- ⑧右手の「パー」を「ゲー」に打ちあげます。
- ⑨「チ」は薬指1本、「タ」は薬指と中指の2本、「プ」は人さし指1本で打ちます。

大淀町
アクセス
マップ



詳しい情報は
ホームページをご覧ください

- JR西日本HP
<https://www.westjr.co.jp/>
- 近鉄HP
<http://www.kintetsu.co.jp/>
- 関西国際空港HP
<http://www.kansai-airport.or.jp/index.asp>
- 奈良県HP
<http://www.pref.nara.jp/>
- 奈良県観光公式サイト あをによし なら旅ネット
<http://yamatoji.nara-kankou.or.jp/>

「桧垣本猿楽座」ゆかりの神社

桧垣本八幡神社



創建は明らかではないが、江戸時代の享保年間(1716-1735)に編集された『大和志』に、「式外 八幡神祠 有四座一座在桧垣本村 北莊七村相共祭典」とある。鳥居の前に「桧垣本猿楽」についての解説板がある。

●〒638-0812 大淀町桧垣本 2092 番地
※近鉄吉野線「下市口駅」より北へ徒歩約 10 分。

大淀町能楽プログラムの拠点

町文化会館(あらかしホール)



自然光をたっぷり取り入れることもでき、内部はその名のとおり、ナチュラルな木の質感を大切にしている 700 人収容可能なあらかしホール。これまで多くの能楽公演が行われている「大淀町能楽プログラム」活動拠点のひとつ。

●〒638-0812 大淀町桧垣本 2090 番地
※近鉄吉野線「下市口駅」より北へ徒歩約 15 分。
TEL.0747-54-2110